



平成27年3月発行 No.15

国立大学法人宮崎大学  
テニュアトラック推進機構

女性研究者座談会	p.1~6
吉永尚紀TT講師のプロフィール	p.1
吉永尚紀TT講師の研究紹介	p.7
『宮崎大学型若手研究リーダー育成モデル』が 事後評価で『S』判定	p.8
TT教員の表彰	p.8
セミナー・シンポジウムのご案内	p.8

## 特集 女性研究者座談会 女性がもっと活躍する大学へ

女性の大学進学率は年々上昇傾向にあり、平成22年度には学部卒業生の43%は女子となっています。しかし、大学院になると女子の修士課程在学率は学部より低く、博士課程はさらに低く、博士修了者のうち女性は28%です。そして研究職に就く女性の比率はより一層低く(14%)、先進国の中で最低レベルとなっています。このことは、我が国では優秀な頭脳集団の30~40%はその力を十分発揮していないことを意味し、グローバル化が進み、競争が激化する世界において日本が後退する大きな要因の一つになっていると考えられます。したがって、女性研究者が研究しやすい環境を整備し、女性研究者が活躍できるようにすることは我が国の科学技術レベルの向上にとって重要な課題です。国は2020年までに研究者のうち女性比率を30%とする目標「2020年30%」を掲げました。宮崎大学は、平成23年、学長自らが「女性教職員の雇用及び活用の促進に努める」ことを宣言した『菅沼プラン』を発表しました。IR推進機構及びテニュアトラック推進機構も若手女性研究者の獲得に努めてきましたが、女性テニュアトラック教員がまだまだ少ないのが現状です。本学で、女性がもっと活躍し、本学の発展に貢献するためには何が問題なのか、何をすればいいかを伊達清花アテナ男女共同参画推進室長とテニュアトラック推進機構に所属する女性研究者二人にお集まりいただき、議論を行っていただきました。

座談会の内容は2ページ以降をご覧ください。

### 吉永テニュアトラック講師が着任しました

平成27年1月、吉永尚紀テニュアトラック講師が着任しました。吉永TT講師は全国で初めての看護学系テニュアトラック教員です。吉永TT講師の研究紹介を7ページに掲載していますので、そちらをご覧ください。

#### 吉永 尚紀 PROFILE

熊本県出身。

千葉大学看護学部看護学科卒業(看護学士)。宮崎大学大学院医学系研究科看護学専攻修士課程修了(看護学修士)。千葉大学大学院医学薬学府博士課程短縮修了(医学博士)。千葉大学医学部附属病院精神科・看護師、同大学医学研究院子どものこころの発達研究センター行動医科部門・特任研究員、日本学術振興会特別研究員(DC2・PD)を経て、本学テニュアトラック推進機構看護学系・テニュアトラック講師となる。現在、放射線医学総合研究所重粒子医科学センター応用診断研究(MRI)チーム・客員研究員、千葉大学大学院医学研究院認知行動生理学・非常勤講師を兼任。

研究課題 社交不安を維持する反すう処理反すう処理(post-event processing)の心理学的実証研究



## 女性研究者座談会 女性がもっと活躍する大学へ

座談会開催日：平成 27 年 1 月 6 日（火）

出席者

司会 伊達 紫 副学長（清花アテナ男女共同参画推進室・室長、フロンティア科学実験総合センター・センター長）

稲葉 靖子 テニュアトラック助教（農学系）

安田 仁奈 テニュアトラック准教授（農学系）

（記事まとめ：伊藤勝昭）

### どのように研究者の道に入ったか

**伊達** 女性研究者を増やすことにつながるという意味で、自分がどのようにして研究者になったか、から話したいと思います。私自身は、研究者になることを目標に掲げ、積み重ねてきたというよりは、仕事を持ちなさい、自分で自立して食べていきなさいという親の教えがありました。次の職業を確実に目指せるような大学を受験するようにとミッションがあったので、親にアピールできる仕事は教員とか、薬剤師とか、医科歯科系の仕事ぐらいに限られていました。実際やってみて幸い、それが自分に合っていた、また面白いことが多かったで、結果的には良かったと思っています。

稲葉先生や安田先生は、研究者になろうと思って、そのプランの下で勉強を積んできたのか、何となく遭遇するものがそうだったのか、どちらでしょう？

**稲葉** どちらかという私は後者ですね。好きなことを続けた結果として、今があります。将来設計とかあまり考えない人でした。

**安田** 母親からは「医者になれ」と言われ続け、高校の先生には「おまえ、絶対研究者に向いてるから研究の世界へ行け」と言われていました。親に従って、医学部を受け、結果的に落ちました。受かったのは、興味があったわけでもない化学で、受験し直して、生物系の学部に行こうかなとも思いましたが、結局当時は生物系学部で何がやりたいかも分からないので、ひとまず化学を勉強しつつ、生物系の自主ゼミサークルに入ったりもして、勉強していました。大学院を受験するときに、化学以外に面白いことないかなと思って、絵画の修復の研究室、植物ウイルスの研究室、医学系のがん研究室などを回りました。どうせだったら夢があって面白そうな方がいいし、実験室に閉じこもっているのは嫌だったので、フィールド調査ができるサンゴ礁の研究室に決めました。

### 女性研究者が少ないことについて

**伊達** 皆さんの周りに女性研究者は少なかったですか？私の時代には、医学部生の 1 割しか女子がいませんでした。その後、医学部はあっという間に 4 割から 5 割が女性になってしまいました。1 割しかいませんでしたので、自分はマイノリティーで意見を発信できないと感じたことはなかったですし、ちょっと勇気があれば意見は言える環境でした。周囲の人も意見は尊重してくれましたし、そんなに不便を感じることはありませんでした。お二人は、今までに、女性が少ないとか、少なくて変な世界だとか、違和感を持ったことありますか？

**稲葉** 私は学生時代、最初の研究室は 3 分の 1 が女性でした。博士課程も 3 割ぐらい女性の研究室でした。だから違和感はなかったです。

**伊達** 本学も博士学生が 3 割前後在籍しているのですが、最終的に教員や研究者になる人は 13～14 パーセントです。博士課程から研究者になる人が少ないという状況は、何か取り払わなければならない阻害要因があるのか、個人個人の意思によるものか、そのあたりはいかがでしょうか。

**稲葉** いろいろありますよね。ただ私は博士号を取っても専業主婦になるという選択肢は素晴らしいことだと思っていますし、研究職以外でも魅力的な職種はいっぱいありますから、それぞれの価値観で人生を選択している人も多いのではないかなと思います。男性陣も、みんなが研究職に就けるわけではないですよ。よく『博士修了者の女性は 28 パーセントで、研究職に就く女性は 14 パーセント』という数値は、メディア等よく話題になりますが、男性の博士修了者のうち何パーセントが研究職に就いているかについては、あまりデータが出てないように思います。日本全体で研究職に就ける人口自体が減っているの、男性陣の方はどうなっているのかなといつも知りたくなります。

**伊達** 女性だけが博士から研究者への道が閉ざされているわけではないと思いますが、固定的な役割分担意識

など女性への阻害要因は多いですね。男性にとっても非正規雇用の研究職などは、次の保証がないとか、さまざまな理由でやっぱり企業の方がいい、という方もいると思うので、女性の数値だけが問

題視されることには、私も抵抗があります。そういう点からしましても、「女性の数値目標」、「女性の活躍促進」といったことが話題になるたびに、働き方の見直しを含め、「男性の活躍応援」になぜ取り組んでいけないのか？と思うことはたびたびあります。男女共同参画の基本として、稲葉先生が言われることはすごく正論で、男女を問わず共に考えていくことは非常に重要だと思います。

個人的には、研究を継続するに当たり、特段困ったことはなかったのですが、マネジメントの立場になってみると、実生活で大変な思いをした人がいることをあらためて認識させられます。ただし支援をするときに考えておかなければならないのは、阻害要因を取り除くために女性に限って支援すべきものとそうでないものを認識しておくことです。言い換えれば、支援することで女性と男性の違いを際立たせてしまうことにもなりかねませんので注意が必要かと思います。

安田先生は、化学からサンゴに行き着くまでの間で、研究者の女性比率はどんどん減ってきましたか？

**安田** 東工大では流体力学の研究室にいて、女性陣には助手の先生や留学生がいましたが、日本人学生は私1人でした。当時、女性が助手をしている姿を見て、博士号を取ったあともこのように仕事できるのだというイメージが持てました。

### 男性に偏ったコミュニティにいる女性の立場

**伊達** やはりロールモデルの重要性というのは、ありますね。そのコミュニティの中で、例えば女の子があと5人ぐらいいたら、もっといいのにとか、感じたことはありますか？

**安田** あります。宮崎大学に来たとき農学部にあまり女

性教員がいなくて知り合いもいなかったのですが、工学部の原子核物理の女性に研究者交流会で会って、仲良くなって、宮崎大学での居心地の良さや楽しさがすごく増しました。ある程度近い世代で、しかも立場も似ている教員の女性で、気の合う人がいるというのはやはりありがたいです。

**伊達** ガス抜きになりますよね。少ないながらも、シンパシーの合う、ぶっちゃけ話ができる人がいなくなると考えると、すごくしんどいというか。いくらよく分かってくれる男性の先輩や、同僚がいても、やっぱり女性の仲間がいると、それなりの楽しみも維持できたり、増えたりします。

**稲葉** 暗いと思われるかもしれませんが、逆に自分の仕事に集中できるということもあります。男性とのしがらみがないので、放っておいてもらえるというか、多分、男性の先生たちも、どう接していいかわからない部分もあると思うんです。

**安田** 確かに。そうですね。

**伊達** 医学科は、基本的に女性教授は1人もいなくて、重要なことを決める会議に出る人がゼロに近い状況がある一方で、毎年40人以上の女子学生が卒業しています。その後5、6年の間に結婚したり、出産したりというライフステージを持つ人が、かなりいるのですが、出産や育児を経て職場復帰を果たすことは、かなり難しい状況にあるのが現状です。上司のほとんどが男性ということもあり、お互いに上手にコミュニケーションを取ることが難しい局面もあります。

ワーク・ライフ・マネジメントを推奨している企業では、必ず上司と一対一で年に2回ないし3回は面談をして、プライベートなことから、自分はどう思って、どういう働き方をしたくて、将来目指すものは何なのかを、必ず聞く機会を設けている会社が幾つもありますが、それはすごく大事だと思います。

### 出産・育児に伴うブランク

**安田** 研究職は、ドクター取ってから、3年任期とか、どんなに長くても5年間、ポスト期間がありますよね。ドクター取って一番最速でも28とかだと、女性はそのとき結婚どうするかとか、子どもを持ちたいかなど、男性よりも時間のリミットがあるのは確かで、30前後の時に先行き不安を覚えたことはあります。そうした悩

みに加え、業績も出さないといけなくて、就職も一寸先が見えないという状況にあると、このまま続けてPIになるよりは、サポート的なほうがいいなと思う人が多くなるのは事実です。一方で、一度研究をやめても機会があったら、また復帰したいと思っている人も結構いると思います。

稲葉さんはお子さんを育てながら御夫婦できちんとやっているのはすごいですね。休んでいる間に焦りみたいなのは、なかったですか？

**稲葉** 焦りは、あまりなかったです。私は大学、修士、博士、そして5年間のポスドクとずっと必死にやってきたので妊娠・出産のため専業主婦をした時期はリフレッシュ期間になりました。その辺は楽天的で人生は何とかなっていくと思っていたのですが、このテニュアトラックというポストに採用されてからは焦りました。なかなか研究者としての勘が戻らないというのと、論文を読む力とか、書く力も落ちていましたし、情報も休んでいた2年の間に随分増えていましたから、今のポストに採用されてからは焦りました。

**伊達** そのリフレッシュから、大変になるであろうテニュアトラックに移る間に、どういう心境の変化やきっかけがあったのでしょうか？

**稲葉** 確かに飛躍があります。専業主婦を楽しんだのは、そのとおりですが、私は、そこまでタフじゃなく、単身で家族離れてキャリアを積むタイプではありません。宮崎で専業主婦をするか、第二の人生を歩むか、選択肢の一つに研究があったので、たまに論文読んだりとか、あと女性がアプライできる奨学金を出したりとか、ハローワークにも登録しました。だから、第二の人生にいろんな選択肢があってその一つがテニュアトラックだったってことです。

**伊達** 専業主婦でリフレッシュしたというようなことは、必ずしも、これからの時代、女性に限ったことじゃないと思います。リフレッシュする時間や、場所などは男性にも必要だろうし、例えば男性が育児休暇を取ったり、専業主夫を選択したりということは、まだまだ一般的とは言えません。男性がリフレッシュを選択す

ることは、まだ日本では自然には受け入れられないですよ。

**稲葉** 男性の場合、病気等で一度仕事をやめると、病気が治って仕事に復帰したくてもなかなかできない人がいるので、それが気の毒だなと思います。

**伊達** 子育てをするのは女性でなければならないという見方でなく、子育てを楽しむ時期が親のどちらにも平等にあっているのではないのでしょうか。博士課程修了後、研究職に就く男性の割合が何割という数値が、どこにも出てこないということと共通項があると思います。

猿橋賞をもらった女性研究者の中には、子育てと両立させながら研究を続けておられる方もおられ、「適当に2年ぐらい専業主婦もしましたよ」と、おっしゃってました。自分の好きなことだから、無理せずに続けておられる様子が印象的でした。さまざまなライフステージの中で、普通なら焦るところをリフレッシュとして楽しむとか、見方を変えて取り組むだとか、心の持ちようを変えるというのは、続けることのポイントかなと思ったりもします。

**稲葉** そうですね。

### 男女が共に参画できる社会

**伊達** もっと子どもの頃からの教育も含めて、日本人として今まで培われてきたものに立ち返って、男女ともに好きなことができ、男女とも子育てに参加し、子どもの成長を見守りながら、親として子どもたちに何か残してあげたり、見せてあげたりすることはたくさんあると思います。そういうことが自然にできる環境をつくっていくのは有権者や政治家が担うことかとも思います。北欧では両親合わせて子供一人あたり480日は育休が取れます。

**安田** 子ども1人当たり？

**伊達** そうです。目いっぱい取ろうと思うと、お互い半分なり、3対1で取りながらキャリアとライフイベントを両立する。しかも給料の80パーセントが出ます。ノーワーク・ノーペイではない状況下で、育児休暇を取れるという仕組みが社会の中に浸透していることは素晴らしいと思います。それと同時に、果たして、それがこれから先の日本でできるのかなとも思います。やるには、誰がどういうアクションを起こしたらいいかと時々考えますが、実際、女性が正規雇用としてキャリアを



継続させづらいということと同時に、男性が仕事以外の分野に参画しづらいという現状は大きいと思います。

**稲葉** 大きいですね。

**伊達** 男性の場合、今は育休を取りにくかったり、ほっとするリフレッシュの1年間で、どうしても取りにくい。これでは競争社会に負けてしまうとか、仕事以外の選択肢が少ないといった現状も確かにあります。

**稲葉** 2人同時に研究者としてキャリアを積んでいくというのは、なかなか難しいですよ。もちろん、できる人もいますけど。

**伊達** それが研究だけでなくいろんな現場で当たり前になって、8割給与出してくれるとなると、そんなに心配なくていいじゃないですか。無給でなく休めるということがベースにあると、もっと船に乗りやすくなったりするのかなと思います。

**稲葉** でも日本ってポスドクだと、産休も取れない。まず、そこじゃないかと思います。もうちょっとポスドクの社会的地位が上がると、全然違ってくると思います。

**安田** あと未来に対する保障がなさ過ぎます。たとえ休めたとしても1年の間だけ、例えば8割ポスドクの給料が出ても、1年間blankができると、3年間のうちの1年は大きいじゃないですか。それで、次にまた就職を探さなきゃいけないときに、見つからないかもしれない。しかも年齢が上がれば上がるほど次の職探しが難しくなると思います。

**稲葉** 私の場合、夫は優秀な人だと思いますが、就活は結構大変でした。私も最初は一緒に就活していましたが、その頃に妊娠が分かったので、これはもう2人で就活したら共倒れになると思って、自分の就活は一旦打ち切りにしました。そして彼がここ（宮崎大学）でポストを得ることが決まったので、当時の仕事はやめて付いて来ることにしました。

**安田** そういう心の余裕があることは大事ですね。

### コミュニティにおける男女のバランス

**伊達** 数合わせは好ましくないという意見もありますが、どこかでダイナミックなことをしない限り、なか

なか男女共同参画は進まないということはありません。例えば、霞が関の上級国家公務員も、課長級以上でのパーセンテージが少ないところで、文科省などは女性新規採用を確実に30パーセントにするという方針を打ち出しています。ということは、その人たちがさまざまなライフイベントを乗り越えていければ、確実に女性管理職の比率は増加すると思います。今、霞が関省庁の管理職の女性が10パーセント以下であっても、新規採用の数値目標を確実にクリアしていけば5年後10年後は恐らく、15パーセント、20パーセントの女性管理職比率を維持できると試算できます。

女性研究者の場合、新規採用の時点で、学部で1年に採用する教員の割合の3割とか何パーセントは、女性を確実に採っていくとかいうことを、申し合わせている学部もあるとは思いますが。現時点での数合わせではなく、持続可能な方法を考えたいですね。

**安田** 女性の指導者の割合を増やすことを考えた場合、助教にまで一度なれば、その人が研究職に残る可能性はかなり上がると思います。ポスドクからファカルティーまでのギャップが埋まれば、多分、指導者の女性の割合が増えますね。

**伊達** 九州のシンポジウムでは、採用時期を一時期にまとめて、3割は女性枠にするといいいんじゃないかという意見も出ていました。半期に5人か6人採用するとして、時期を揃えて、そのうち3人とか、2人までは確実に女性を採ってくださってというふうにすると、まだ見えやすいですね。そうすると、みんなに見えやすく、意識にとどまりやすくなるという意見もありました。工夫はいろいろできると思います。ところで、女性枠があったら応募しますか？

**安田** 実際に応募して助成金をいただきました。そういうのはありがたいですね。女性枠だと競争的には大きなチャンスです。

**伊達** ある企業では、女性10人か20人の中にわざと1人男性役員を入れて、今あなたが立ってるその位置が普通の女性が日頃感じている環境なんだということを確認させる試みを行っていると言いました。女性管理職が置かれている環境を肌で感じる機会になっているようです。

**稲葉** 確かに育児の現場でも、ママ友同士のいがみ合いってあるから、そういうところに男性が入ると、男



性がバッファーになると思います。

**伊達** 日本の社会では、さまざまな現場で、ゆがんだコミュニティが形成されやすいのですね。

**稲葉** そうですね。そのためにドロップイン・ドロップアウトが、もっと自由にできないといけないと思いませんか？日本では1回仕事辞めちゃったりすると、戻るのがすごく大変です。

**最後に 阻害要因を取りはらうために**

**伊達** いびつな構造から正常な構成にするには、いろいろな阻害要因を除かないといけないでしょうね。

**安田** 博士号を取って一度、第一線から離れて子育てが落ち着いたぐらいの優秀な人を再雇用するようなことを大学や研究機関ができると、その人はポテンシャルが高いから、双方にとってよいでしょう。主婦のパワーってすごいですよね。おうちで働いて子育てしてる人って、マルチで同時並行にいろんなタスクをこなす能力が、すごく高くなっているの、研究でも役立つはずですよ。

**伊達** 数値目標にとらわれ過ぎるのは抵抗がありますが、阻害要因があるためにできなかった人が何とか頑張れる環境とか、自分たちで引っ張り上げる仕組みづくりは必要だと思います。

私たちの事業では、今のくらい女性教員がいて、どうしたいのかを客観的に一步一步、皆さんに知らせていったり、理解を深めてもらうというところに、力を入れていきたいと思っています。今ある男性中心の社会の中で、それに賛同してくださる一人ずつの中で変革が起こって、その人たちがフェアな目でジャッジするという、ごく正常なことが普通になってほしいのです。根底には、女性だから、男性だからといった性別による固定的役割分担の意識を、男性側からも女性側からも払拭したいです。ちゃんと個人個人の能力を評価するということでバイアスを掛けないこと、また、そのことに対しプライドを持ってやってくださる上位職の先生方がもっと増えて、そういう意識が当たり前となるような啓発の機会を繰り返し設けたり、話し合ったりするチャンスがもっと多くあればいいなと思います。



座談会の模様

(左から) 名城教務職員、伊達副学長、木附事務職員、安田 TT 准教授、稲葉 TT 助教

(当日はオフィスの職員からも意見を述べていただきましたが、紙面の都合上割愛しました。)

ご案内



第5回 宮崎大学男女共同参画シンポジウム

日時 平成27年3月16日(月) 10:00 ~ 12:00

場所 宮崎大学 附属図書館3階 視聴覚室(木花キャンパス)

プログラム

開会挨拶(原田 宏 理事・副学長)

宮崎大学女性研究者奨励賞表彰ならびに受賞者による研究発表  
(受賞者: 農学部畜産草地科学科 井戸田 幸子准教授)

基調講演(文部科学省: 予定)

各部局長による現状・課題の報告および意見交換(進行: 伊達 紫 副学長)

総括および閉会挨拶(菅沼 龍夫 学長)

主催 宮崎大学清花アテナ男女共同参画推進室

吉永尚紀テニユアトラック講師の研究紹介

私は、社交不安症あるいは社交不安症状の病態メカニズムの解明や介入法を確立するために、認知行動療法（理論）を基盤とした基礎・臨床研究を進めています。

社交不安症とは？

社交不安症は「人との交流場面で生じる著しい不安や恐怖」を主症状とする精神疾患で、その有病率の高さや生活障害度の大きさが特徴とされています。わが国においては、この疾患の罹病費用（労働損失額など）が本邦の経済状況に多大な負担を与えていることから、大きな社会問題となっており、最適な治療法を確立・普及することが急務となっています。

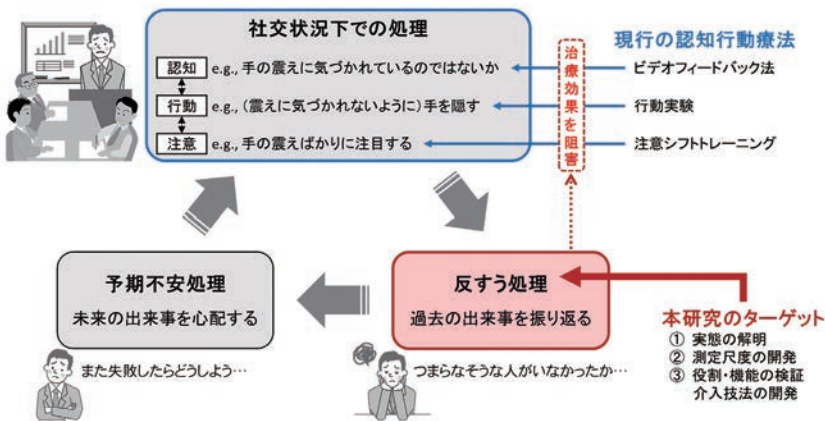
認知行動療法とは？

認知行動療法とは、時間限定的・現在焦点型・目標志向型の精神療法です。この治療では、生活上の困り事・問題を維持する「認知」や「行動」に焦点を当て、治療面接や宿題を通してこれらの修正を行っていきます。この治療法は、主に不安症やうつ病を抱える方に用いられますが、その他の精神疾患や身体的な問題を抱える方にも適用することができます。

研究内容

社交不安症に対する治療として、抗うつ薬または認知行動療法を用いた治療は、国外で実施された多くの臨床試験により、その有効性が示されてきました。特に認知行動療法は、薬物療法と比較して、治療脱落率や再発率が低いことから、治療の早期導入が推奨されています。しかしながら、本邦では社交不安症に対する認知行動療法の効果研究が極めて少なく、また、国際治療ガイドラインにおいては、標準治療（抗うつ薬）で改善を示さない場合の治療法が確立していないという問題があります。私はこれまで、社交不安症に対する最適な治療アルゴリズムの確立と普及を目指して、認知行動療法の標準化とその効果検証（臨床試験）、さらに、脳科学的な作用部位・機序の解明に向けた研究を進めてきました。

しかしながら、海外の臨床試験も含め、認知行動療法により寛解に至る社交不安症患者は半数程度と限定的であるため（抗うつ薬治療の場合は30%程度）、既存の病態理論の洗練化と認知行動療法の改良を行う必要があります。そこで現在は、「社交状況が終わった後に、自分のパフォーマンスや他者の反応を否定的に振り返るプロセス」である反すう処理（post-event processing）に焦点を当てた研究に取り組んでいます。この反すう処理は、社交不安症の病態を維持する重要な因子であると理論的にはいわれていますが、その心理学的メカニズムは実験的に検証されておらず、また、介入技法も未だ確立していません。私の研究では特に、①社交不安症に特異的な反すう処理の実態を明らかにした上で、②反すうを測定する尺度を開発し、さらに、③心理学実験を通じて、反すうの役割と機能の検証と、これを修正する介入法の開発を行っていきます。



Clark & Wells モデル (1995) における社交不安症の病態メカニズムと本研究の位置づけ

Q & A コーナー

Q. 研究者を目指すきっかけは、何でしたか。

A. 私は父が研究者ということもあり、研究に従事できる職業に幼少期から高い関心がありました。さらに、修士課程修了後には臨床現場（病院）で働く機会を頂き、その中で研究の必要性・意義を再認識したことで、「研究者になりたい」という意思が確固たるものになりました。

Q. 学生の方へ一言をお願いします。

A. 医療系の学部・学科に所属する学生は、「臨床実践」と「研究」を分けて考える傾向があります。ところが臨床の場で、「より臨床実践」をするためには「科学的思考」が必須となります。「私は臨床がやりたいから…」という臨床志向の学生さんも、「研究」を通して「科学的思考」を身につけるために、卒業研究の機会を大切に、さらに大学院進学も目指して頂きたいと思います。

## ★『宮崎大学型若手研究リーダー育成モデル』プロジェクトが事後評価で「S」と判定されました

平成 21 年度に文部科学省「若手研究者の自立的な研究環境整備促進」事業に採択され、平成 21 年度から平成 25 年度末まで実施してきた本学の『宮崎大学型若手研究リーダー育成モデル』プロジェクトの事後評価が実施され、文部科学省科学技術・学術審議会の下にある研究計画・評価分科会の研究開発評価部会において総合評価で「S」と判定されました。平成 23 年度の間接評価における「S」判定に引き続き誇るべき成果です。これは学長を先頭としてテニュアトラック制を牽引してきた IR 推進機構、テニュアトラック推進機構、及びそれらを支えてきた教職員の努力の賜です。

## ★奥山 TT 准教授が日本銅学会から表彰されました

平成 26 年 11 月 8 日、日本銅学会第 48 回論文賞を奥山勇治テニュアトラック准教授（工学系）が受賞しました。受賞対象論文は銅と銅合金第 53 巻 1 号 (2014) に掲載された「熔融銅用起電力型水素センサの実用化」です。

## ★山子 TT 助教が整形外科学会で表彰されました

平成 26 年 10 月 10 日、鹿児島市で開催された第 29 回日本整形外科学会基礎学術集会において山子剛テニュアトラック助教（工学系）がパネルディスカッションで発表した演題「術後の骨量減少を生じない理想的な人工股関節システム」に対して学会長から表彰がありました。

## ★元 IRO 特任助教の井上准教授、井口准教授がハイステップ研究者表彰を受けました

トムソンロイターの学術文献引用データベースにおいて、2003 年から 2013 年の期間で被引用度が上位 1% 未満に入る論文を公表した著者 9 名が学長よりハイステップ研究者表彰を受けましたが、この中に IR 推進機構に所属していた井上謙吾農学部准教授及び井口純農学部准教授が含まれています。ちなみに、科学技術・学術政策研究所が発表した「サイエンスマップ 2012」による 2007～2012 年に発表された科学論文を分野別に調べたデータでは、IR 推進機構出身の上記井上准教授の論文 2 報、稲葉丈人農学部准教授の論文 2 報が世界のトップ 10% に含まれています。

## ★セミナーのご案内 次の 3 つのセミナー・シンポジウムが開催されます。ふるってご参加下さい。

（紙面スペースの都合上、詳細はテニュアトラック推進機構ホームページに掲載しています。）

### 1. 国際経済研究シンポジウム「日米中 3 国間貿易の変貌とアジア経済の新局面」

日時：平成 27 年 3 月 14 日（土）14：00～18：00

場所：宮崎大学木花キャンパス教育文化学部棟 第一会議室

主催：テニュアトラック推進機構・小山大介テニュアトラック准教授

### 2. セミナー「The Double Life of ATP: extracellular nucleotide signaling in plants」

日時：平成 27 年 3 月 23 日（月）10：30～12：00

場所：宮崎大学農学部 L102 教室（セミナーは日本語で行われます）

主催：テニュアトラック推進機構・稲葉靖子テニュアトラック助教

### 3. セミナー「蛋白質立体構造解析の最前線」

日時：平成 27 年 3 月 23 日（月）13：00～18：00

場所：宮崎大学図書館視聴覚室（木花キャンパス）

主催：テニュアトラック推進機構・和田啓テニュアトラック助教

## ★編集後記★

宮崎の冬は晴れる日が多く、しかも快晴日が多いです。ちなみに気象庁データでは、2014 年 12 月に 2mm 以上の雨が降った日は 3 日、晴れの日が 13 日でした。今年 1 月はそれぞれ 7 日と 17 日、2 月は 3 日と 15 日でした。全国でもっとも明るい冬を過ごせるのは宮崎でしょう。多くのプロ野球やサッカーチームがキャンプに訪れるのもうなづけます。今号は、暖春にふさわしく女性座談会特集を組みました。

## TT 推進機構 NewsLetter No.15

平成 27 年 3 月発行

編集・発行 国立大学法人宮崎大学

テニュアトラック推進機構

（事務支援組織：テニュアトラック推進オフィス）

〒889-2192 宮崎市学園木花台西 1 丁目 1 番地

（附属図書館 3 階）

電話・FAX：0985-58-7675

E-mail：ttoffice@of.miyazaki-u.ac.jp

URL：http://www.miyazaki-u.ac.jp/ttkikou/